

安定した愛着もしくは母子間の相互作用に有害な影響をもたらすのではないか？

2. 保育が子どもの認知発達、社会的発達、社会的能力並びに社会協調性について直接、間接にもたらす影響は何か？
3. 子どもに保育を受けさせる家庭は、子どもの発達に及ぼす影響力が少ないのではないか？

これらの各質問について、NICHD 乳幼児保育研究の結果からお答えしてまいります。

資料 1 は、家族の所得ならびに母親の就業が子どもの発達に与える影響を与えるという母親の信念を考慮した上で分析をしています。子どもが生後 15 カ月の時に行ったストレンジ・シチュエーションテスト(見知らぬ人と出会った反応をみて母親の愛着を評価する方法)で、母親の愛着安定性が測定されています。

これを見ると、母親の心理的適応性が愛着の安定性に関係していることがわかります。母親の心理的適応性が高いほど、子どもの母親に対する愛着安定性は高くなります。母親の子どもへの心理的適応性は、母親の不安感、落ち込み、社会性、楽しむ心、楽天性、協調性、信頼感、有用性、寛大性を総合して測定されました。

母親のセンシティブリティもまた愛着安定性に関係していますが、これは測定の尺度により

ます。コールドウェル & ブラッドレーの H.O.M.E.(面接と観察を組み合わせる構築した半体系的な方法で、家庭で行われるテスト)を用いてセンシティブリティを測定した場合、母親の乳幼児に対するセンシティブリティや反応が強いほど、愛着が安定する可能性が高くなるということがわかりました。しかし、母親と子どもの遊びを通じて測定したセンシティブリティについては、有意な影響は見られませんでした。

保育の家族への影響をお話したいと思っておりますのでまず愛着における保育の影響について見てみましょう。資料 2 から、保育の質の二つの尺度として、積極性のある保育を受ける頻度と積極性の強さ別にみた保育、そして 1 週間の保育時間、保育開始年齢は愛着の安定性に有意な影響を与えていないことがわかります。この分析では、家族の特徴、母親の態度、親による育児を考慮しています。

次に、保育により子どもの母親に対する愛着を予知できるかどうかを見てみましょう。母親のセンシティブリティが低い場合や週 10 時間以上の質の低い保育、生後 15 カ月以内に 2 回以上も保育形態を変えようといったことが、愛着不安定性の確率を高めています(表 2)。たとえば、母親のセンシティブリティと保育の質の双方で点数の低かった子どもたちのうち、愛着安定性の高い子どもの割合は 44% ~ 51% でした。その他の子どもたちでは、愛着

資料1 愛着の安定性／不安定性の解析 母親の影響	
心理的な適応性*	安定 > 不安定
センシティブリティ* - 遊び	(有意な影響は見られない)
センシティブリティ - 家庭**	安定 > 不安定
*p<.05 **p<.01 ※赤ちゃんの心を読み取る力。Sensitivity.	

資料2 愛着の安定性／不安定性の解析 保育の影響	
積極性のある保育を受ける頻度	有意な影響は見られない
積極性の強さ別にみた保育*	有意な影響は見られない
保育の量(時間)	有意な影響は見られない
開始年齢(生後何カ月)	有意な影響は見られない
保育が安定した年齢	有意な影響は見られない
※訳者注: 保育者の乳児に反応する積極性を段階別に分けてみる	